

夫婦で地元の工芸を守る。  
一人産地の和紙職人と窯を継ぐ陶芸家。



薪をくべて火を起こし、大きな釜で楮を煮る。水にさらした後、木桶で叩いて繊維をばぐす。通常は一工程を丸一日続ける。

左上／煮込んだ楮を山から引いた水にさらす。右上／根から出るところが紙の繊維をつなぐトロロアオイ。下／釜場にある三角形の装置は楮で和紙を乾燥させるもの。

一人工房で和紙を漉く川原隆邦さん。冷たい水に手から湯気が出る。壁に飾ってある簾は、先代が使っていたもの。

手わざが生み出す  
用の美  
2

蛭谷和紙  
×  
川原隆邦  
越中瀬戸焼  
釋永陽



水分を切った紙は一枚ずつ乾燥させる。川原さんは手漉きで日本一薄い紙を漉く。現在も機械に負けない薄さを目指して研究中。



わざと繊維を残して風合いを出したり、漉(は)みを利用して山の形を描いたり、原料の処理と漉き方のかけ算で、何通りもの紙が生まれる。

一人産地の先駆けとして  
面白いことを試していく。

「江戸時代の里山には、共同の釜場があり、どこの家でも自分で和紙を漉いていました。だからこの工房も、そんな場所にしていきたい。本気で和紙をやりたい人がいれば使ってくればと。いつでも歓迎します」  
そう話す川原隆邦さんは、富山県朝日町に伝わる蛭谷和紙の職人。蛭谷和紙は、八尾和紙、五箇山和紙とともに越中和紙として、国の伝統工芸品に指定されていますが、職人は川原さんだけです。たった一人で産地を守っています。築80年の工房にある大きな釜で、楮を煮込み、木槌で叩いて繊維を細かくする。水にさらして簾で漉く。昔から変わらぬシンブルでスタンダードな製法にこだわっています。

「地元こんな面白い場所があるのに誰も使っていないから、自分でやることに。春夏に楮を育て、秋に原料を取獲し、冬に紙を漉くという、日本の風土に合った生活をしないとできない仕事で、そこに興味をもちました。だから昔のままのスタイルでやることに意味があると思っています」

朝日町には戦前まで120軒の和紙工房がありました。それが一気に廃業。危機感を抱いたある女性が一人で25年間守った後、病に倒れ、ご

主人の米丘寅吉さんが引き継ぎました。その25年後に米丘さんに弟子入りしたのが川原さんです。

「師匠は病床の奥さんから口伝で紙漉きを教わったそうです。僕が弟子入りしたときも、師匠は80歳を超えて引退状態だったから、やはり口頭で説明してもらって、繰り返し失敗しながら覚えました」

米丘さんが亡くなって4年。手取り足取り教わったわけではなくても、60年以上にわたり一人の職人が引き継いできた蛭谷和紙のスタイルは、身体に染み込んでいます。その上で「こんな紙が欲しい」という声があれば、それに応えるため試行錯誤を繰り返し、新しい方法も取り入れる。和紙の魅力を伝えるため、商品開発にも力を入れています。

「スタイルを守ること、出会いがあり、新しいものが生まれる。そういうつながりが面白いですね」

さらに、和紙の原料の楮やトロロアオイの栽培にも取り組んでいます。朝日町を飛び出し、自宅近くの立山町でも畑を開墾し始めました。

「楮やトロロアオイは全国どこでも栽培できます。だから蛭谷和紙の全国展開なんてことも面白いかも。過去にもよりよい環境を求めて職人が移動して、工芸が発展したケースもありますから。今後は一人産地が増えていくと思うから、自分がその先